

2年連続 十勝が全道一 昨年大豆収穫量 市町村別トップは音更

2018年5月8日

十勝管内で大豆の生産が伸びている。農林水産省によると、2017年の収穫量は2万8200トンと2年連続で全道一だった。管内は自他ともに認める「豆王国」だが、大豆は05年を最後に全道一から遠ざかっていた。豆腐などの原料として国産大豆の需要が高まる中、手間がかからず取引価格も安定していることから作付面積が拡大している。17年は市町村別の収穫量で音更町が全道一だった。

農水省が4月、17年の大豆収穫量の確報値をまとめた。17年は天候に恵まれ、管内の10アール当たり収量は262キロと16年から24%増加。作付面積も1万700ヘクタールと若干広がり、収穫量は26%増と高い伸びだった。

管内は小豆や枝豆、インゲンで高い道内シェアを誇るが、大豆は15年まで空知が主産地で「豆類では大豆だけが管内の存在感が薄かった」（十勝農協連）。

だが、ここ数年は消費者の国産志向が強まり、国産大豆を使った豆腐やみその売れ行きがいい。さらに、豆腐加工に適した高収量品種「ユキホマレ」が普及したことが、管内農家が栽培意欲を高める背景だ。05年と比較すると、17年の管内収穫量は2.1倍、作付面積は2.3倍に達する。

大豆は栽培の手間があまりかからない上に、J Aがコ

ンバインを貸与したり収穫を代行したりする動きがあることも追い風だ。気候変動で夏から秋の高温傾向が続いた場合、ビートやジャガイモなどの寒冷地作物は悪影響を受けやすいのに対し、大豆はむしろ収量が増えるとの予測もある。

大豆生産量を管内の市町村別に見ると、音更町が6560トンで首位だ。帯広市（4400トン）、芽室町（3900トン）が続いた。輪作体系に大豆を組み込んでいる農家は少なくない。

大豆栽培は全道でも増加傾向が続いており、昨年産は10万500トンと16年比19%増えた。十勝管内以外の市町村では長沼町（空知）が6540トンと音更町に次ぐ全道2位だった。岩見沢市（同）、士別市（上川）も多かった。

砂糖生産30万トン超え 収量、糖度高く9年ぶり 管内17年産ビート

2018年7月15日

十勝管内の2017年産ビートを使った砂糖生産量が、16年比48%増の約30万1800トンとなったことが道農政部の調査で分かった。30万トンを超えるのは08年以来、9年ぶり。17年は収量が多かった上に、平均糖度も17.2%と高く、全道生産量（65万6600トン）の半分近くを占めた。

日本甜菜製糖の芽室製糖所、北海道糖業本別製糖所、ホクレン清水製糖工場の管内3工場の生産量を集計した。全工場で16年産を大幅に上回り、日甜芽室が41%増の18万トン、北糖本別が97%増の6万2200トン、ホクレン清水が34%増の5万9600トン。ほぼ倍増となった北糖本別がホクレン清水の生産量を抜いた。

管内のビート作付面積は2万5556ヘクタール、農家数は2989戸とともに16年より減っている。半面、16年は相次ぐ台風の接近・上陸という特殊要因があり、17年産の1ヘクタール当たり収量は70.99トンと約4割増えた。

豊作によって工場の稼働期間が長くなった。日甜芽室は昨年10月中旬に開始した製糖作業が今年5月27日に完了。延べ日数は16年産より53日多かった。北糖本別とホクレン清水は今年3月上旬に作業を終えた。

また、全道の砂糖生産量も16年から30%増えた。工場別では首位の日甜芽室に続き、ホクレン中斜里製糖工場（オホーツク管内）が15万4000トン、日甜美幌製糖所（同）が6万2300トンだった。

